

令和6年能登半島地震の被災地へ職員を派遣

令和6年1月1日に発生し、大きな被害をもたらした能登半島地震。被災地では復旧が進む一方で、今も多くの人が避難生活を続けています。

町は、道と道教育委員会からの派遣要請を受け、石川県輪島市と白山市に危機対策課、学校教育課から2名の職員を派遣しました。

今月号では、早期復旧への一助として、避難所での支援や教育現場での子どもたちへの心のケアなどに取り組んだ職員の経験や被災地の様子をご紹介します。

被災した輪島市の様子



地盤の隆起により海岸線が海側へ移動しむき出しになった消波ブロック



倒壊したビルと押しつぶされた家屋



火災により焼失した輪島朝市



1階部分がつぶれた家屋

物資拠点管理・支援 物品受払業務に従事



危機対策課
守屋亮太主任
派遣場所 輪島市
派遣期間 3/1～3/10

災害派遣で感じた備蓄の重要性

私は、被災地の中でも被害の大きい輪島市へ、物資拠点管理・支援物品受払業務のため派遣されました。元消防士であり、数々の凄惨な現場に直面してきましたが、輪島市に着いてこれまでに見たことがない規模の被害を目の当たりにし、自然の力の大きさに恐れを抱きました。

主な業務内容は、物資拠点へ送られてきた支援物資の搬入や保管、避難所への物資の搬送作業でした。避難所からの物資の要望は、天候や気温により日々変化しており、自宅での備蓄品も、季節など状況に応じた準備が欠かせないと改めて感じました。

また、輪島市職員から「発災から3日間は道路の寸断等で食料品等を配布できず、何も食べることでできない住民がいた」と伺いました。やはり、食料品等の備蓄は最低でも3日間分、可能ならば1週間分の用意が必要です。さらに、最も苦労したのはトイレで、すぐ不衛生になり、トイレを起点に感染症がまん延したそうです。食事を摂れば排泄するのが人間。食料品等と同じくらい携帯トイレの備えが重要と痛感しました。

教職経験を活かし、生徒を支援

この度、地元を離れ集団避難した生徒と教職員の支援に携わりました。生徒たちは、3か月間もの長い間、親元を離れた生活を続け、また、教職員も被災者でありながら、自校の生徒の生活や学習のサポートを行っていました。

私は、主に生徒の生活指導全般を担いました。翌朝までの勤務の中、なかなか寝付けない生徒もおり、自分たちだけでの避難生活が長引くことの大変さが随所で見られました。生徒たちは、ある日突然、被災者となり、家族や仲間たちと離れた慣れない生活の中をよく辛抱し、よく耐えて生活を送っていたと感じます。避難所生活最終日、ある先生から「地元に戻っても、まだ断水が続いていたり、避難所生活を続ける生徒がいたり」と日常とは言い難い生活が続きます」と伺いました。

今、被災地においても新学期を迎えています。いつ起こるかわからない災害に対して、今回の教訓をどのように生かし、自分事として意識するかがとても重要と感じています。

避難生徒の生活指導・ 環境整備に従事



学校教育課
川村秀夫参事（学校教育指導主事）
派遣場所 白山市 白山青年の家
派遣期間 3/16～3/24

地域防災セミナー開催

6月8日（土）10時00分～11時30分

「災害時における薬剤師の活用法」

講師 櫻田 渉

（北海道医療大学薬学部講師）

6月8日（土）11時45分～12時45分

「災害事例について・備蓄品の紹介」

講師 守屋 亮太

（当別町危機対策課危機対策係主任）

会場：当別町総合保険福祉センター ゆとろ

定員：各回30名

受講料：無料

申込期限：6月3日（月）17時00分

申込：北海道医療大学

学術交流推進部地域連携課

TEL:0133-23-1129

Mail:nice@hoku-iryu-u.ac.jp

